

日印文化友好パネル展開会式（インドと日本：響き続ける文化的友好関係）における城内外務副大臣開会の辞

平成 27 年 9 月 3 日

本日は各国からの著名な参加者の皆様の前で、また、日印両国の長年に亘る文化的友好の証であるこれらの展示の前で、ご挨拶させていただけることを光栄に、また、心より嬉しく思っております。

シャンバラ教授の御説明とともにこの展示を拝見すると、1400 年に亘る我が国の仏教の歴史を総覧することができるとともに、仏教というものが如何に深く我が国の文化や思想に影響を及ぼしてきたかを一目で理解することができます。

しかし、更に注目すべき事実があります。この展示の中で示されている文化的つながりの背景に、インドはもとより、アジアの他の近隣諸国の多くの人々の関わりがあったということです。

6 世紀に日本に公式に仏教を伝えたのは、朝鮮半島の百済の聖王と言われております。また、5 度もの失敗にも屈せず、我が国の仏教の発展のため危険を冒して渡航した唐の高僧、鑑真の存在も広く

知られています。そして8世紀に、我が国が誇る奈良東大寺の大仏の開眼供養を行ったのは、インドから遥々我が国を訪れた菩提僊那でした。これら多くの先人の存在があったからこそ、1400年という時間、何千キロという距離を越えて、今日この場で、仏教という要素を通じてアジアの多くの国々が互いに結びついているのです。そしてこのことに、一人の日本人として強く心を動かされます。

仏教の影響を強く受けた我が国の文化の一つに茶道があります。その茶道で来客をもてなす際の心構えとして、「一期一会」という言葉があります。これは「一生の中で、この人と会うことができる機会はこれが最後かもしれない」ということを心に留め、常に後悔のないよう、最大限に心のこもったもてなしを行うというものです。

この精神は茶道に限られたものではありません。人と人が交わる上で、与えられた機会の一つ一つを可能な限り活かしていくことで、初めて様々なものが生み出され、広められ、そして継承されていくのです。先人たちの貢献に思いを馳せつつ、今日ここでの皆様との出会いを、未来に向けた貴重な交流と創造へとつなげていきたいと思えます。

ご清聴ありがとうございました。